

# 脱近代化運動としての有機農業

宇根 豊 (うね ゆたか)

福岡県福岡地域農業改良普及センター (電話092-806-3400, FAX092-806-3367)

ぼくは、有機農業運動(減農薬運動も含む)に脱近代化の可能性を見る。ただ論議の核を、百姓の主体に、つまり百姓の「私(し)」に置き、技術論を中心に、語りたい。

## 1、生産力の脱構築

増収、増産を人間の本性だと言いくめるのは近代化思想だと証明するためにも、生産力の豊かさをもう一度表現しなおさねばならないだろう。

生産力を生産高(収量)だけで見るのでは、土はやせ、メダカはいなくなり、村の風景は荒れ、化石エネルギーの多投は続き、地域の関係性は薄れ、百姓は生きがいを失い、食べ物の安全性すら疑われる事態になっていることを、図1は示している。

生産をあげるとは、こういうことではなかったはずだ。

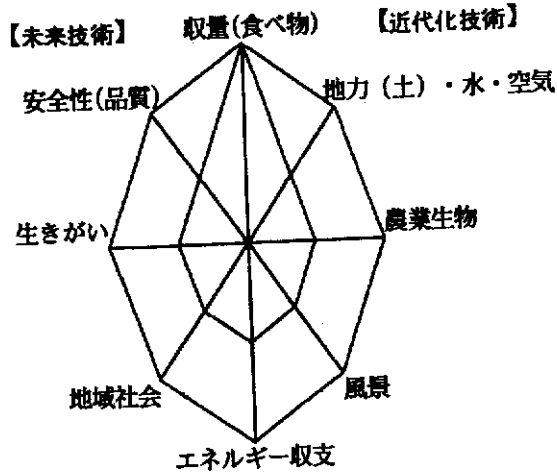


図1 生産力の概念の脱構築のモデル

## 2、カネの脱構築

カネにならないモノは価値のないモノだろうか。カネにならないモノを生産することは意味のないことだろうか。いまカネにならない世界の豊穡さを表現する言葉が生まれつつある。外部経済論はその言葉の一つに過ぎない。有機農業運動(それに限らず、百姓はその存在自体が運動でなければならぬのだから)は生産の過程を、もっと豊かに表現し、回りの人たちに伝えていかねばならない。「産直」もまた、その土台に過ぎない。有機農産物を食べる消費者が、有機農業の生産過程で生みだされるもの(図1で全的に表現されたモノ)に対する対価を支払っているとは思えない。またそれは産直している消費者だけが負担すべき筋合いのモノではないだろう。たとえば田んぼで生まれる赤トンボやメダカやカエルやホタルは地域や国民全部のタカラモノだから。

## 3、自然環境の脱構築

カネにならないモノの最たるものとしての自然環境を、所与のものとしてではなく、農の生産過程で形成されるモノだとして、認知する運動が始まろうとしている。

誰からか聞いたことがある

今日の話で初めて知った43	11%	田んぼで見て気づいていた46
---------------	-----	----------------

図2 老百姓の意識(赤トンボが田んぼで生まれていることを知っていましたか)

赤トンボのほとんどは、水田で生まれている。多い田では、10aで5000頭の薄羽黄トンボが羽化している。ところで、消費者が赤トンボの出生を知らないのはやむを得ないとしても、当然百姓は仕事の中でそのことに気づいているものとはばかり思っていた。ところが図2は、平均年齢74歳の百姓の回答である。つまり、百姓にとって、赤トンボなどの農業が生みだす自然環境は、対象化されていない、と言っていい。科学で捉えられていない、と言っていい。だからこそ、赤トンボは「自然」だと認識されてきたのだと思う。近代的な戦後の稲作技術が普及浸透したにもかかわらず、未だに「自然環境」は農業技術の外にある、とも言えるだろう。したがって、私たちの今後の課題は、この自然環境を技術の中に位置づけることだ。(環境の技術化)

#### 4、技術の脱構築

「公」に奉仕する近代化技術ではなく、「私」を豊かにする技術の有りようが見えてきている。

表1 技術論の整理

	「私」的技術	「公」的技術
1	土台技術(非マニュアル化技術)	上部技術(マニュアル化技術)
2	(気)構えの技術	省力技術
3	外部経済技術	低コスト技術
4	志の技術	大義の技術
5	個別的な技術	普及性(普遍性)のある技術
6	非生産技術	生産技術
7	寡黙な(経験の)技術	多弁な(科学的な)技術
8	(対象に)接近する技術	(対象から)遠ざかる技術
9	資源自給型の技術	多資材技術
10	達成感とは無縁な技術	達成感のある技術
11	自給を守る技術	自給を破壊する技術
12	関係性が広がる技術	孤独な技術
13	地域の中の自己表現の技術	「自己実現」の技術
14	余裕の技術	余裕のない技術
15	自然を感じる技術	自然を感じない技術
16	欲望を鎮める技術	欲望を煽る技術

こうした二項分析の手法をとることによって、近代化技術の覆いをとりはらって百姓の対象(自然)と向き合う姿勢とその反映である技術の本質に迫ろうとするものだ。  
くわしいことは、当日にくわしい記述を配布する。

これからの農業は有機・減農業技術による「安全性」の追究からさらに進んで、農が生みだすモノ全体を、みんなのタカラモノとして認知させていく農業技術の体系をつくりあげなければならない。戦後の近代化技術は画一的で、普遍性を持っていた。それに対して、環境を大事にする技術は、個別的で、多様であって、画一的な「指導」「普及」がしにくいものになるのは当たり前だ。

#### 5、食べものの脱構築

生産結果としての食べ物ではなく、生産過程をも内包する食べ物であれば「身土不二」もたやすく説明できる。これは生産力の脱構築とも運動することだが、その田畑の生き物や風景や水や空気や土や百姓の姿も、食べ物の属性と見るのだ。

#### 6、政治の脱構築

何のために百姓するのかと問われて、「私」の農業論では、国や国民のためにという答えに代えて、自分のため、過去や現在や未来の家族のため、地域のため、つながっている消費者のため、と答える。それであってもなお「私」を越えて存在価値のあるのが、農業である。つまり農業は産業ではなく「存在業」である。当然農政も産業政策から、存在政策へと転換せねばならない。

#### 7、地域の脱構築

有機農業は広がらないとぼやく百姓がいる。周囲が理解しないとぼやく百姓がいる。それはその百姓に「運動論」がないか、「運動論」が狭量だからだろう。地域の中にまだまだ温存されているタカラモノについて共通の言葉を持ちえないようでは情けない。地域に身を沈めて、地域を表現する新しい言葉を有機農業は生みださなければならない。地域がなければ、環境は豊かにならないし、技術の関係性は深まらない。

農業の近代化はほとんどなし遂げられたように見えるが、本当はそうではない。近代化に浸食されずに残っている「くらし」と「技術」に深く目を凝らしてみると、近代化にもめげず、残った世界こそが未来に残せるのだろう。ここに脱近代化出発点がある。日増しに「農業をめぐる情勢」はよくなっている。なぜなら、そうした脱近代化の思想が未来思想だと感じる人間が増えてきているからだ。有機農業(減農業)運動はそうした可能性と、期待を担っている。